

テストのための教育／学習？

わたしは中学、高校、大学、そして市民講座での教育経験がある（中学、高校は中高一貫校での3ヶ月のみ）。そのなかで、もっとも熱心な学習者は市民講座の受講生だった。受講生はほとんどすべて自分よりも年上の人たちだった。自分が学びたいから、受講料をはらって学びにきていたのだ。「自分の人生をより楽しいものにするために学ぶ」という姿勢をみると、おしえる側も、やりがいを感じられる。「うてば、ひびく」という感触がえられるからだ。

生涯学習ということばがある。おとなになっても、いつでも好きなようになにかを学ぶことができるように、社会としても支援するということであり、そのために、生涯学習センターが各地にある。ここで重要なのは、そのようなハコを用意するだけでなく、学びたいことを学ぶための、生活のゆとりが保障されているかどうかということだ。働きすぎれば、休日は「体をやすめる」ことにしか使えない。未来の展望がなければ、学習意欲がもてない。

やりたいことがあり、それをやるだけのゆとりがあるということが、第一に必要である。

学校での教育は、システム化されており、その仕組みになじめる人と、なじめない人がいる。テストで高得点をとることや宿題をこなすことも、できる人にはできても、みんなにできることではない。そして、学ぶこと自体がたのしくないと感じられてしまい、なげやりになってしまう学習者がうみだされる。そこには学校文化があり、その学校文化のなかで、他者化されてしまう学習者がいる。

学びたいから、学ぶ。それをささえる環境があれば、のびのびと学習できる。テストのための学習という観念から解放されてみると、学んだことが身につく。

テストのユニバーサルデザイン

藤芳衛（ふじよし・まもる）は「大学入試センター試験とユニバーサルデザイン」というコラムで、センター試験の現状と改善にむけたとりくみをつぎのように説明している。

…中途失明者、重度の弱視者及び特に重度の読字困難者の受験を可能にするため、2次元ドットコードを活用した2種類の音声問題を開発している。センター試験には、点字問題と拡大文字問題しか用意されていない（ふじよし2017:5）。

大学入試センターは、「受験上の配慮案内」をウェブで公開し、どのような障害のある受験者がどのような配慮をうけられるか説明している（http://www.dnc.ac.jp/sp/center/shiken_jouhou/hairyu.html）。

たとえば、発達障害のある受験者は、

- ・試験時間の延長（1.3倍）
- ・チェック解答
- ・拡大文字問題冊子の配布
- ・注意事項等の文書による伝達
- ・別室の設定
- ・試験室入口までの付添者の同伴

を希望することができる。ただし、申請が必要であり、医師の診断書や高校でじっさいにそのような対応をうけているかどうかを説明することが要求されている。

ここでのポイントは、読字障害（ディスレクシア）の人も自分で文章を読むことが要求されていることである。センター試験は文章を筆記する必要はないが、文章を自分で読むことが前提になっている。藤芳が指摘しているように、テスト問題を音声化するという対応はしていないのである。

入試とカリキュラムの再検討

では、ニューカマーの受験者にとっての入試にはどのような課題があるだろうか。児島明（こじま・あきら）は『ニューカマーの子どもと学校文化』で高校進学を希望する外国籍者すべてが入学できるようにするためには、既存の受験体制とカリキュラムの見直しが必要だと主張している。

具体的に言えば、各都道府県下の高校における受け入れ校の指定、特別枠・特別選抜による受け入れ、学力試験における特別配慮（ルビを付す、時間を延長、別室試験、辞書持ちこみ、キーワードによる解説、など）、入学後の特別指導等の実施を早急に検討しなければならない。それと同時に、既存のカリキュラムの見直しも必要であろう。知へのアクセスをできるだけ容易にするために、漢字・漢語の使用を最小限にとどめるといったことが考えられるべきであろうし、学習内容をより普遍的に意味あるものへと精選する必要があるだろう（こじま 2006:213）。

「特別配慮」ということになると、それを否定的にとらえる層がでてくるだろう。そこで生じる摩擦に対して、ていねいに説明していくこと、日本の学校文化という全体をといなおすなかでニューカマーの子どもの学習という一部について議論していくことが重要である。また、受験やテストのありかたについても、再検討していく必要があるだろう。

ともに学ぶということ

教育機関が競争と排除の論理でなりたっていれば、均質化された空間になじまない学習者は他者化され、参加することができなくなってしまう。ともに学ぶ、ともに生きるということに価値をおく社会にならなければ、テストのありかたも、学習のありかたも従来どおりのかたちが継続される。

とはいえ、障害者差別解消法以後の現在では、障害のある学習者を排除しないという価値観は、制度化されたものであり、否定できないものとなっている。そういった価値観を「多様な文化」に適應するのか、しないのかということが問われている。

性別二元論、異性愛中心主義を「多数派の価値観」であることをみとめ、それがすべての人にあてはまるものではないことを認知するなら、学校の設計や学習内容も、かえていく必要がある。

高齢世代を見れば、在日朝鮮人や被差別部落出身者、身体障害者のなかには、文字を（ほとんど）よみかきできない人がいる。それはこれまでの教育や社会、文化のありかたが、「すべての人」を包摂するものではなかったからである。「学ぶこと」、その権利がすべての人に保障されていなかったからである。そこで、だれでもいつでも学ぶことができる環境を整備する（学習権の保障）と同時に、文字がよみかきできなくても社会生活に困難が生じない仕組み（ユニバーサルデザイン）をつくっていく必要がある（あべ2005、2014、かどや／あべ編2010）。ともに学べなかった人のこの存在をふまえて社会をつくることもとめられる。

これまでの歴史と現状をふまえて、教育という営みや学校という空間をといなおしていく必要がある。多文化社会について考えることは、この社会の過去をふりかえるための、現在をみつめなおすための、未来を構想するための着眼点になりうる。それを考えるのは、この社会で生活しているすべての人である。多文化社会ということを考えるのは、そのようなことであると、わたしは考える。そこに意義があると思えるか、それがおもしろいと感じるか、自分と関係があると感じられるかどうかということは、あなた次第である。なにかを感じるなら、この授業にも意味があったのだろうし、なにも感じられなかったとすれば、わたしの敗北である。

毎回の授業内容で大事なポイントは、学生ひとりひとりが見いだすものである。見いだせないときは、教員が失敗した、あるいは、あなたには「あわなかった」ということである。自分にひびくものを見だし、それについて、自分で追求すること。そのためのきっかけづくりを教員はしている。教育をしているのではなくて、学習支援をしているのだ。

参考文献

あべ やすし 2005 「識字と人権」 『人権と社会』（岡山人権問題研究所）1号、31-44

あべ やすし 2014 「情報のユニバーサルデザイン」佐々木倫子（ささき・みちこ）編『マイノリティの社会参加—障害者と多様なリテラシー』くろしお出版、156-179

岩瀬直樹（いわせ・なおき）／寺中祥吾（てらなか・しょうご） 2014 『せんせいのつくり方—これでいいのかな」と考えはじめた”わたし”へ』旬報社

内田良（うちだ・りょう） 2015 『教育という病—子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』光文社新書

かどや ひでのり／あべ やすし編 2010 『識字の社会言語学』生活書院

児島明（こじま・あきら） 2006 『ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』勁草書房

佐久間孝正（さくま・こうせい） 2015 『多国籍化する日本の学校』勁草書房

志水宏吉（しみず・こうきち）／清水睦美（しみず・むつみ）編 2001 『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店

すぎむら なおみ／「しーとん」編 2010 『発達障害チェックシート できました—がっこうの まいにちを ゆらす・ずらす・つくる』生活書院

藤芳衛（ふじよし・まもる） 2017 「大学入試センター試験とユニバーサルデザイン」『ノーマライゼーション』6月号、5ページ

堀尾輝久（ほりお・てるひさ）ほか編 1996 『学校文化という磁場』柏書房

松尾知明（まつお・ともあき） 2013 「日本における多文化教育の構築—教育のユニバーサルデザインに向けて」松尾編『多文化教育をデザインする—移民時代のモデル構築』勁草書房、3-24

保井隆之（やすい・たかゆき） 2009 『みんなが主人公の学校』大日本図書

柳治男（やなぎ・はるお） 2005 『〈学級〉の歴史学—自明視された空間を問う』講談社

ポイントの解説：

多文化教育の空間としての夜間中学：佐久間孝正（さくま・こうせい）は『多国籍化する日本の学校』において、「義務教育に相当する教育機関で学級の多文化、多民族化をもっとも端的に示すのは、夜間中学である」と指摘している（さくま2015:137）。生涯学習という視点からいえば、学習の場は社会のなかにたくさんある。識字教室、日本語教室などのように、ボランティア中心で自主的に運営されているものもある。外国人学校、民族学校もある。学びの場の多様性そのものが多文化社会をうつしだす鏡であるといえる。

教育におけるパターンリズム：教育は、子育てとおなじで、「このようにすれば正解」というものがない。なにをどのように教えるのか。どこまでは「教える」ほうがいいのか、どこからは「自分で考える」ようにしたほうがいいのか。正解はない。内田良（うちだ・りょう）は、「教育という「善きもの」は善きがゆえに歯止めがかからず、暴走していく。「感動」や「子どものため」という眩い（まばゆい）教育目標は、そこに潜む多大なリスクを見えなくさせる」と指摘している（うちだ2015:4）。「あなたのため」といいながら、自分の願望を投影しているだけではないか。ときには、そのように自問する必要もある。

「先生」になったら：日本では学校現場の「先生」にじゅうぶんな時間の余裕がない。たとえば部活動の顧問は「先生」のボランティアである。そのような状況のなかで、「いい先生」であることを期待される。いい先生でありたいと願うこともあるだろう。そんなとき、自分たちがおかれている状況を客観的にふりかえることができれば、問題のありかが見えてくる。なにかうまくいかないのは自分だけのせいではないことに気づくことができる。ここでは『〈学級〉の歴史学』（やなぎ2005）、『せんせいのつくり方—これでいいのかな」と考えはじめた”わたし”へ』（いわせ／てらなか2014）を紹介しておく。

正解主義の問題：小中高の教育では、「ひとつの正解」を設定し、正解か不正解かを判定することが多い。そのため、複数のバリエーションがあるものについて「どちらが正解なのか」と疑問をもってしまう場合がある。しかし、社会のなかには、「正解」がなく、自分で判断するしかないこともたくさんある。ものごとを相対的にとらえるということは、正解がひとつではないことを認識するということである。

研究と独自性：大学では、独自性に価値がおかれる。たとえば研究論文は、これまで論じられてこなかったことについて、独自の視点から追求することが期待されている。研究の独自性は、その人の名誉にかかわる。

コメントの紹介

初対面の人にぎこちなくなってしまうことを「コミュ障」と言う人が多いけれど私もそれはちがうと思う。誰かがコミュニケーションがとりづらいつ感じている場のことを「コミュニケーション障害」とよぶのではないかと思った。私は誰ともきちんとコミュニケーションがとれていないのではないかと今日の講義をきいて思った。今私の頭に思い浮かぶ人には誰ひとり「いやだ」も「たすけて」も言える人がいない。多分私にそれを言ってくれる人もいない。私は沈黙にとえられないタイプで誰かという空間がうまれるとどうにかしてしゃべろうとしがちになる。話題をしぼり出して会話が続いているあいだは楽だけれど会話が終わろうとすると不安になる。それも「コミュニケーションはいいこと」というのが私の頭のすみにあって強迫観念のようにになっているからじゃないのかと思った。友達が嫌いなわけではないけれど、電車で友達と会うと「逃げたい」と思うし、途中で降車して1人になった瞬間に「終わった」と安心する。自分の気持ちを共有するためのコミュニケーションなのにいつのまにかコミュニケーションするためのコミュニケーションになってしまっている気がする。

私は人と会話のキャッチボールをしたり、話題を振ったりするのが苦手で、自分をコミュ障だと思っている。高校で1番仲良かった子に、ある日「○○とは一緒におるだけで落ち着くわ」と言われてとても救われた。声に出して行うコミュニケーションだけが大切なわけではないのだと分かって安心した。

…コミュニケーションは「おたがいさま」という言葉はとても心に響きました。私と話している時は盛り上がらないのに、その相手が他と話して盛り上がっているのを見て、私はコミュニケーションを取るのが下手なのかなと思うことがありましたが、この考え方は自分の心の重みを取ってくれるように感じました。落ち込まずに焦らずに、ゆっくり相手と良い関係をつくっていきたいと思います。…後略…

私は小さい頃、極度の人見知りでした。小学校に入ってからもなかなか先生とうまく話せなかったり、みんなの前で発表するとなると緊張して上手に話せませんでした。小学校1年生のときの教師と母の2者面談で「佐々木さんはあまり人と話すのが得意ではなさそうです。もっと積極的に周りとかかわっていきましょう。静かな子は、自分の思っていることをためこんで、それが将来大きくなってから暴発してしまうこともあるかもしれません。」と教師が言ってきたそうです。私の両親は、私が静かな性格だということを理解してくれていたのでも「どうして静かだとだめなのですか」と反論してくれたそうです。その話を私が高校生のときに聞いたのですが、とてもショックを受けました。このような経験があったので、教育現場で積極性が強要されがちだという話は、たしかにそうだなと思いました。…後略…

グループワークは、同じ授業を受ける、知らない人達とすることに意義があると思います。友達同士で帰り道に意見交換をすれば、友達同士で、同じ学科で、性別で、だとしても意見が似通ったりすることが多いと思います。以前他の授業のグループワークで、「できるだけ学年、性別、学科がバラバラになるように」先生が組んだときは、自分が思いつかないような視点の意見がかなり出ていて、刺激になりました。…後略…

…あまり授業内容について話さない人や興味のなさそうに見える人でも、話し合いですごくいい意見を出すという場面をよく見ます。

私は「コミュ障」という言葉を使っていじられたり、人がいじられているのを見ると、とても不快な気持ちになります。社会福祉学科で、知的障害や発達障害について学んでいるので、「障害」という言葉を、コミュニケーションのことで使うのが嫌です。また、「コミュ力」は時と場合によって変わるものだと思います。普段「こいつはコミュ障だ」といじられている子も、とても仲の良い友達や家族の前ではペラペラと話しているのを見ると（全然コミュ障じゃなくない？）と思うことがよくあります。一般的に、口数が少なかったり、大人し目だったりする子が「コミュ障」とか「コミュ力が低い」とか言われがちなんじゃないか？と思い不思議です。私は、口数が少ない子でも、きちんと意思疎通ができていたら全然コミュニケーションが取れていると思います。性格上、話すのがゆっくりだったり、発する言葉を丁寧に選んでいる人が、「コミュ力が低い」と言われてしまうのは、なんだか良くないなあと思います。乱れた言葉を使って、マシンガンのように話す人が本当に「コミュ力」が高いんでしょうか？そもそもコミュニケーションをする能力ってなんなんだろうかと疑問に思います。

…県大の図書館にあるグループ学習スペースは、話し声をよく注意されるので困る。話し合っていてうるさくしているわけでもないのに注意されると、仕方がないことだけど利用しにくいと感じてしまう。…後略…

iCoToBaにスピーキングの練習スペースがありますが、隣の人とのキョリが近く、物音がよく聞こえます。…後略…

これはコミュ障に入るのか分かりませんが、私の声のトーンは聞き取りにくく、滑舌も良くないので、人と話すときは緊張してしまいます。自信が無いからだと思います。また、最近は言い間違いも多いです。肉声でのコミュニケーションは、かなり親しい間柄でないと、気張ってしまって疲れます。人前でも話すのが上手い人は本当に尊敬します。私はどうしてもSNSを使っただけのコミュニケーションでないと、スラスラ話せません。考える時間があるからですかね。ただ、たしかにコミュニケーションは2人以上でするものなので、お互い様なのかもしれません。じゃあ単に話すのが苦手なのはなんて呼ぶんだろう。よく聞き返されてしまってそのたびに気が重いです。それでまた自信が無くなって…。負のスパイラルです。『スケッチダンス』という漫画に出てくる、スイッチというキャラクターがいるんですが、彼は一切声を出さず、いつもパソコンを利用してコミュニケーションを取っています。私も肉声じゃなくて他のものでコミュニケーションを取りたいです。コミュ障ではなく、ツールが悪いんだ！と言いたい。

…インスタのDMで知らない人から「名前教えて下さい」と言われたことがあります。その人のアイコンを見る限り親切な感じがしたのですが、もしかしたら悪い人かもしれないと思ったので、偽名を使いました。うそを教えてしまったので、この状況は、私が悪い人で、相手が被害者みたいになってますよね。そもそも知らない人だっというのが…。

【あべのコメント：名前を聞くほうが悪いです。】

私は3年生で就職活動の準備をしているのですが、企業が求める人材という欄を見ると決まって「自発性・積極性」などという言葉が書いてあります。自発的・積極的な人が会社に利益をもたらせる可能性があることは分かりますが、多くの会社は上から言われたことに従順な社員も必要としているだろうし、会社の言うことに従っている人は果たして自発的な人と言えるのかと思いました。…後略…

…私のバイト先は困ったことがあったり、新人の自分1人でなんとか解決できたことでもみんなで共有した方がいいことがあったりするとみんな必ず店長や先輩へ伝える環境になっています。ヒヤリハットやミスを隠すということがなく、常に全員が状況を把握できるバイト先の環境は、私はこのバイトでしか働いたことがなくて気づいてなかったけれど、コミュニケーションをちゃんと取れるいい環境なんだな、と気づきました。他の方がおっしゃっていましたが、ドイツの履歴書は歯を見せて笑う写真が良いと聞いて、とても驚きました。日本では独特の文化なのか、卒業写真でも免許の写真でも、正式なことに使う写真は口を閉じておしとやかな感じで撮るイメージが強い気がしました。…後略…

履歴書が日本のようにフォーマットが決まっているが、それに合わせた模範解答が決まってしまうと思う。就職活動に向けて就活サイトを見ていると、「先輩のES（エントリーシート）」が見られるサービスがある。これは、このESが模範解答だ！といわれているようで、なんとなく嫌です。さらに、履歴書の内容だけでなく、たとえば留学やボランティアの経験があると有利になる等、も嫌だなと思う。

…履歴書に限らず、字が汚いと、その人はガサツだのような勝手な印象をつけられるのが嫌だ。どうがんばっても字が汚くなってしまいます。

…アルバイトの履歴書を書く時、志望動機の欄がいつもいつも何を書こうか迷う。正直、お金を稼ぐためにアルバイトをしたいわけだし、そこを選んだ理由も、時給が良いとか、家から近い…とかその程度。ネットで志望動機の書き方を検索してみると、書く際のポイントや注意点などが載っているが、どれも正直嘘っぽいように感じる。就職活動なら、必要だとも思うが…。…後略…

大学の授業でも、積極性がほぼ全ての授業で評価されていて、おしゃべりが好きな子にはいいけれど、控えめな子にはつらい評価基準だなと思いました。「外国語学部なんだから積極的にコミュニケーションしないと」というふうに考えられがちですが、疲れてまでそういうことをするのはどうなのかと思うし、全員が全員そうじゃなくてもいいと思います。じゃあ他学部へ行けと思われるかもしれませんが、純粋に言語としての英語が好きで学びたい人もいるだろうし、全てを積極性で評価するのはあまり賛成できないなと思いました。…後略…

【あべのコメント：「外国語学部なんだからコミュニケーションに積極的でないといけない」という風潮があるんですか。なぞですね。／わたしの授業は、文章で表現することが苦手な人はいい評価がされないわけで、どういう評価なら完璧だというのはないですね。選択肢を保障するなどしないと。しかし、わたしにはその余裕がありません。】

今の人たちは何でも機会や経験が足りないので少しぐらいは強制的に話し合いの場を設けることが必要だと思う。進行の方法や意見の聞き方を学べる機会とすればありだと思う。

基礎演習という授業で、レポートをかくときの注意点として隠れた前提と話が飛躍しないことがありました。隠れた前提とは自分の中だけのイメージで前提をつくっていたりすることなのですが、最初の四角の上に丸2つ書くという問いかけに解答がいくつも出てくるということをきいて似ているなと思いました。自分の中の隠れた前提は自分自身で見つけるのは難しく、相手がいることで初めて気づくことができるのではないかと思いました。レポートなど文字で書くときには何度も確認するため、気づきやすいが、人と話しているときにはとても気を配っていない限り会話にねじれがないようにするのは難しいと思いました。「積極的」という言葉は良い意味であり、こうなるべきなのだ小学生のときから先生に言われてきたし、自分でもいつのまにかそう思うようになっていました。しかし、私の性格的にはどうしてもリーダーシップがある行動をするのは難しく、なぜ積極的になれないのだろうとストレスを感じていました。しかし、大学に入学してフォロワーシップという言葉を知り少し心が軽くなりました。フォロワーシップよりもリーダーシップの方が積極性があるように感じますが、フォロワーシップ精神が合う私自身は協力したい思いは同じなのだと思います。

大学のディスカッションの授業で、“Introverts”というトピックでディスカッションをしました。“Introverts”というのは、「内向的」という意味で、大人数でいるよりも数人あるいは1人の方が好き、話すことよりも考えることの方が好き、という人たちのことを表していました。その授業で見たTEDスピーチ“The power of introverts”では、学校でいつも評価される、良いとされるのは“introverts”と逆の“extroverts”な人であるが、それはおかしい、両方に良い所があるはずだ、と主張していました。アメリカ人プレゼンターだったので、アメリカでは日本よりも学校でグループワークなど発言が必須な場面が多く、外交的な人間が得をすることが多い環境ではあると思います。一方、日本は講義型、受け身型の授業が多いため、内向的、introvertsな性格でも劣等感を感じるものが少ないかと思っています。最近、アクティブラーニングなどでコミュニケーション能力や積極性が求められる授業が増えていくようですが、extroverts、introverts両方の性格に良い所がある、ということ教師は理解する必要があるかと思いました。…後略…

高校の頃の部活で、上手にパフォーマンスができなかったときに、スタッフさんにものすごく怒られることがあった。あまりにも怖くてみんなだまりしていると「なぜ何も言わない。積極的に意見しろ」と言ってくるのが恐怖だった。意見すればまた言い返されるのに、こんな場面で積極的になるべき？とずっと思っていた。

【あべのコメント：そういう状況をダブルバインドといいます。どうすればいいのよ！どっちにしてもしんどいじゃん、という。】

…今回自分は身体、知的障害者の施設に実習に行ってきたが、そこでは、あいうえお表を使ったり、トーキングエイドを使ったりして文字を伝える方、手をグーパーにして、「はい」か「いいえ」のみを伝える方、うなずいて意志を示す方法等様々な方がいた。自分は言葉で伝えるのが当たり前の世界に居たので、実際にこのような場面を目の当たりにしてとても衝撃を受けた。どんな人でも、何かしらコミュニケーションを取ろうとしている事が分かる。それを理解しようとする努力をしなくてはいけないと強く感じた。…後略…

わたしは、定期的に人とコミュニケーションをとるのが嫌になってしまうことがありました。学校に来て人と話すのも、バイト先でお客さんに話しかけられるのも全部です。それは、一緒に暮らしている親に対しても同じでした。今はほとんどそんなことはないですが、少し前は人の声が普段より大ききこえて（？）その音だけでドキドキしてしまいます。まあ少し経ったらすぐ治まるんですけど、そういう時は家でも部屋に一人にしてほしかったのに、家族に説明したらおかしいと言われてちょっとつらかったので、今日の「コミュニケーションを拒否することがあってもいい」というのは救われました。ありがとうございます。また、今日の問いについてですが、わたしはTwitterを利用することで趣味などの話題が共有できる友達を、しかも年代関係なく作ることができたのでそこは良い点だと思います。しかし匿名ゆえのトラブルなども（わたしやわたしの周りはないですが）聞くので、使い手の意識だと思います。

「四角の上に丸2つ」というのを聞いて、私の好きなアーティストが出されたお題を決まったリズムで絵描き歌をつくり、他の人はそれを聴いて描く、というものだった。お題は うさぎ や ぞう など簡単なものであったがあまり伝わっているものはなかった。「丸みを帯びたU字の水槽」という有名なフレーズがあるが、1人1人の考えや感覚は異なるので正確に伝えるのは難しいと考える。…後略…

…私自身、本来は人と話すことが好きで、家でもその日にあったことをずっとお母さんに話しているくらいなのですが、中学校のころ、仲間はずれにされ、クラスで1人孤立してしまったこともあってか、今でも中学校の友だちを前にすると、人が変わったかのように、言葉が出てきません。今年の1月に成人式があり、中学を卒業して以来、ほぼ初めて中学の同級生に会ったのですが、やっぱり上手く話すことができず、そんな自分に対しても、ショックを受けました。高校以後の友達とは普通に話すことができるのに、「中学校の同級生」という一部の人を前にすると話せなくなります。いま世の中にある「コミュニケーション障害」という言葉が、その人のとある一面だけを見て言っているのだとしたら、それは本当にその人のコミュニケーション能力について言及していることにはならないのではないかと思います。

「コミュ障」という言葉はコミュニケーションをうまくとれないことを卑下して使っていることは少ない気がする。初対面の人とうまく話すことができないことを「ひと見知り」というように「コミュニケーション障害の略」というよりは「コミュ障」という新たな1つの言葉のようにとらえている人が今の若者がほとんどだ。そこに人を見下すような意味はあまりない。…後略…

コミュ障という言葉は周りだと人みしりだとか、話を続ける（間をもたせる）のが苦手だとか、面白い話が出来ないといったところの意味で使われるが、そうやって自称する人はたいてい話上手だったりする。けっこう軽い感じで使われているように思う。あるいは、保険として使われることもある。「私コミュ障だから～」と前置きしておくことで、相手にそういう印象を与え、聞き手側に回ろうとする使い方もある。

…私は今まで「会話を続けることができない」から「コミュ障」だと思ってたし、そういう意味で使ってた。

授業での強制的な話し合いについて、私はあまり意味がないと思います。たいては関心のないことに対して、思ってもいないような万人受けするよううわべだけの意見ををつらつら述べる話し合いは時間がもったいないと思います。最近の教育は型にはまったことしか子どもにさせていなくてつまらないと感じます。

…グループワークは教育実践として成功していると思います。授業後に“今日の授業の〇〇って…”と、友人で話したことは全くありません。そうやって強制させられることで考える力を育てているように思えます。…後略…

私はグループワークが好きではありません。中学の道德の時間などによくグループで意見を言い合う時間があった気がしますが、あまり仲良くない子と話し合うのが苦手でした。理由は、本音ではなく、綺麗事を言って終わり、ということが多かったからです。「こういう意見だと先生が喜ぶんだらうなー」とか考えてしまって、思ってもないことを話すことに意味があるとは思えませんでした。…後略…

…「じゃあ今から〇分間意見を交換してください」というより、「これをクリアするのに〇分間あげます、とかの方が、協力し合ってやっているような気がします。…後略…

…少数人数で話し合っただけでそれぞれが意見を述べるのと、40人ぐらいのクラスで1人あてられて意見を述べるのとでは、グループワークの方がコミュニケーションとりやすい環境であり、よりたくさんの意見が出てくると思うのでいいと思う。…後略…

私はあまりグループワークが好きではないです。その話しあい内容について考えたいのに相手を気遣って言いたいことも言えないことがある時が一番嫌な気持ちになります。特に話し合いするメンバーが知らない人や友だちではない人だと有意義な話し合いはできません。普段を知っている人が、いつもと違った考えや話し方をするので何か得るものがある訳で、普段を知らない人に言われたら、「それって本当？」と疑ってしまったり、中々信じられないです。

…今の日本は自己責任スキームの傾向があり、なんでも自分の責任と思うような流れがあるということを他の授業で学びました。コミュニケーション能力の問題も自分の問題と私たちのほとんどは思うと考えられるが、私たちの能力が発揮できるような環境づくりができていないのが問題でもあるという考え方を知れてよかった。私は教師を目指しているので、子どもたちが自然と積極的になれる環境をつくりたいと思いました。

…最初の授業で机が固定されているのが嫌だという話と関係して、[ラーニングコモンズでは]机が自由に動かせるということは使い方、用途が一気に増えることに繋がると思いました。

岡崎市の図書館「リブラ」にも会議室以外に10代専用の「ティーンズルーム」という部屋がある。私も中・高校のときによく利用していたスペースで、本が並べてある中にその部屋があって、音漏れがしないように個室になっている。机と机とが何組かあって全面ガラスばりの部屋で外から中がわかるようになっており、私はそこで友達と教え合いながら勉強していた。このスペースはグループワークだけでなく、そういった勉強の面での話し合いに使えて、特に数学などをお互いに考えながら答えを見つけるのが、ただ机に向かって1人でやるよりも身になっていたと思う。そういう場があったことはとてもありがたいことだったし、もっと広まってほしいと思う。

私の高校にはラーニングcommonsがありました。WiFiが完備していて、すごくおしゃれな場所でした。席もソファでパソコンがいっぱいありました。そこがとっても快適な場所だったため、先生がいない自習時間にラーニングcommonsでさぼる人達が徐々に出てきました。ラーニングcommonsはしゃべることができるので、何でも勉強に関係ないことでも話していいと思う人達もいるので、場所の意味をはっきりしなければいけないと思いました。

【あべのコメント：高校でもラーニングcommonsを導入している例があるのを知りませんでした。検索してみると、いろいろできますね。】

先日、図書館についての講義を受けた後に、鶴舞の図書館に行く機会がありました。自習室や休けいスペースに加え、地下にラーメン屋まであったことに驚きました。中学生や高校生と思われる人たちが多く利用しており、昼の時間をまたいで図書館を利用できるので良いなと思いました。…中略…最近では「コミュ障」以外に「陰キャ」「陽キャ」という言葉もよく使われていると思います。明るくて友達が多い人が「陽キャ」、暗くて友達が少ない人が「陰キャ」と分類されていますが、そんな風に人間を二分するのは無理があるし不快に思います。…後略…

【あべのコメント：「陰キャ」「陽キャ」という語がとびかう世界を知らないの、年をとったのかなと思います。】

…積極的になれというのは個人の性格、内面について言っているようなものであり、へたしたら個人の性格に介入しようとしているととらえられ、人権侵害になりうるのではないかな。…後略…

【あべのコメント：そう思います。「教育」ということになると、そういうことが問題視されない風潮がある。】

何を得意とするか、何の分野であれば自信を持って積極性を出せるか、が人によって大きく異なると思いました。高校3年の文化祭の準備期間にそのことを実感しました。普段大人しい子が背景の壁画作りのリーダーをつとめたり、合唱部の子が合唱の指導をしたり、劇の脚本を頑張って書く人、劇の主役をやるとげ人…いろんな分野で、それを得意とする人が皆をひっぱっていているのを見たので、やはり「積極的になれる状況」があることは大切だと思いました。…後略…

「ヒヤリハット」の概念を初めて知りましたが、とても良いアイデアだと感じた。自分も、バイトをしているため、ミスや怒られることも少なくない。しかし、それを経験することで「次は気をつけよう」という気になる。しかし、「ヒヤリハット」の取り組みを実行すれば、その最初の失敗をなくすることができるし、注意も増やすこともできる。まずは、自分の失敗談を伝えることが大事だと思った。

以前ある事業所の所長さんにインタビューした際に、履歴書で趣味や家族について尋ねる必要を聞いた。その所長曰く、趣味がある人は仕事以外に打ち込む物がある人ということが分かり、家族がいる人は仕事を投げ出さないからということであった。しかしそれを聞いて私は仕事と趣味は関係なく、また何となく良い印象を与える趣味、一般的な分かりやすい趣味でないといけなような気を求職者に与えると感じた。また家族の有無と責任感本人の資質を間接的に測ろうとするところに何か別の意図がある気がする。積極性の強要に違和感があるのと同じように、個性を強制されるのもおかしい。個性の表出は当然、個人差のあるものだろう。

…私自身は「コミュ障」ということばをほとんど使うことがない。それは、私自身が内気な人と本当に障害を持つ人の区別ができないからだ。できないから、「コミュ障」を気にしないし、使わない。相手が話題を作れないのなら、こっちが話題を作ってあげればいい。その方法で会話できればコミュニケーションができていく。そのときに、相手からの答えをせかないこともコミュニケーションを取る上で大切だと思う。人には人のペースがあるから、自分の方がペースが速いなら相手に合わせてあげることも大切だと思う。自己中心的に考えてしまって、自分と比較して、会話に参加していないという理由で、「コミュ障」認定してしまう人は考えを改めた方がいいと思う。…後略…

自分は恐らくコミュニケーション能力がそこまで高くないと自覚している。仲が良くない人、知らない人にしゃべりかけるときに、とっさに声が出なかつたり、言葉が出なかつたりする。それだけでなく、仲が良い、よく知っている人に対してさえも言葉が詰まってしまうこともしばしばある。僕は自分のそういうところが余り好きではない。本当はとても欲張りで、自己主張の激しい方の人間であると自覚しているのだが、どうしても人前では緊張してしまうと、頭が真っ白になる。心臓がドキドキして、早く立ち去りたい気持ちになる。コミュニケーション能力がとても大事な今、僕はとても危ない道をたどろうとしている。例えば、就職活動中の面接やらグループワークは命取りだ。なぜこのような人間になってしまったかという、多分発表をできるだけ避けてきたからだと思う。今後はしっかり発表できる人になりたい。

【あべのコメント：よくわかります。目標をもつのはいいことです。わたしも人前ではなすのがずっと苦手で、かつぜつがよくないことで、しゃべること自体に苦手意識がありました。いまでは授業なんかやっていますけどね。けれども、わたしは文章を書くことで勝負したい。学会発表とかあんまりしないです。最近は依頼されてしゃべることばかり。なにごととも経験。そして、得意なことをのばすのも大事。】

自分も親に「コミュニケーション下手だね…」とがっかりしたように言われることがあって、結構それを気にしていたのですが、自分の会話のペースはすごく遅くて、親のペースは私からしたらすごく早くて、そういった不一致でうまくいかなかったり、今話したい気分ではない…とかもあつたりして、それは私が悪いとかではなくて、お互いが歩みよらないと成立しないことだよなあと思いました。だから、コミュニケーション能力を一時的なものではかつてはいけなしい、お互い広い心をもって接したいなと思いました。…後略…

SNSは、誰かと繋がるのはもちろん、自己表現を出来る場であることも長所だと思った。ある美容院の採用項目のところに、インスタのアカウントを（あれば）書いて下さい、というのを見て、SNSで自分を売り込んだり、お客さんを集める時代なんだと思った。何を投稿しているかだけでなく、いいね数やフォロワー数も考慮されるのだろう。

…SNSのコミュニケーションツールの短所として、感情を細かく伝えられないことが挙げられると思います。昔、友人が別の友人とLINEで連絡をとっていた時、『「！」や絵文字、顔文字が1つもついていないこの子怒ってるのかな？』と不安がっていました。私も普段「！」や顔文字等を使わないタイプなのですが別に怒ってるわけではないと思うんだけどなあ…と思いました。

…SNSはトラブルが多いイメージもありますが私は好きでよく使います。同じアニメが好きなフォロワーさんたちと、そのコンテンツのイベントで会つたりお話ししたりすることは大きな楽しみです。顔を見ないでつきあう方が上手くいくこともあると思うし、気心知れた仲になって、とても信頼できる人も多いです。安全に気をつけつつ、これからもSNSを正しく利用していきたいと思います。

コミュニケーション能力という言葉聞いた時、中学や高校で「コミュカおばけ」と言われていたことを思い出した。「コミュカ高いもんで友達すぐできるら〜」と何度も言われた。私も今日取り上げられるまでは、深い意味を考えず人と話すのが得意な人がもつ能力だと思っていた。環境や相手ということは頭になくて、変化することも知らなかった。英語で communicate with とあるように（withがあるということは複数）コミュニケーションが相互の関わりで成り立つことを忘れてはならないと感じた。「積極性」で評価するということについて、実際中学の時にそれで評価されていた。通知表の評定を決める時に「積極的な態度」とあつた。よく考えたら統一感を出そうと学校がしている中で違う意見など言いにくいのは当たり前だと思う。ここでも環境というものが関係している。…後略…SNSの話ではないが、iPhoneのAirDropを使って、電車に乗っていた時に突然変な画像が送られてきて気分悪かつた。知らない人と気軽にやりとりできるのはリスクが高かつた。すぐAirDropは切つた。

成功しているかどうかとは別ですが、私はグループワークが好きです。一般教養の授業で強制的に組まれた子とグループワークを行うと、ふつう自分と関わりのないような学科の子から意見を聞けるからです。自分とはちがうものの見方をしたりしていて、とても有意義に感じます。でも有意義にするためには、初対面の人たちをまとめて上手く進行する人が必要なので、難しいと思います。／私はこないだ電車の中で性的いやがらせの被害に遭いました。私は嫌だったので、駅長さんに報告、証拠も提出し、最終的には警察沙汰となり、加害者は逮捕されました。何度も性的いやがらせを行っていたようで、私以外の何人の子が声をあげられなかつたのだろうと思うと辛いです。「こんなことで」と思われるかもしれないとか、恥ずかしいだとか思つてしまい、私は一度声をあげないことを選んだのですが、友人に相談すると、「絶

对言ったほうがいい！」と言ってくれて、その友人と一緒に駅員さんのもとへ行きました。私はこの友人のおかげで、声をあげることができました。被害に遭った子が泣き寝入りせずに訴えられる環境が公的なところでもっと整えられたらいいなと思いました。

【あべのコメント：あくまで加害者が悪いことなので、被害をうけたとき、そのときどき、できること、できないことがあると思います。それは、それぞれ正解なのです。100%加害者の責任で、加害者が悪いのです。訴えられる環境がとても大事ですね。いっしょに声をあげてくれる人がいることも。】

テストについて、他人とちがう意見をかくと点数が高くなるのはどうしてですか。

【あべのコメント：とてもいい質問です。これは大学文化、大学教員の文化に関係しています。大学教員というのは、研究者です。研究者というのは論文をかきます。論文というのは独自性が要求されます。「これまで発表されてきた研究の数々」（先行研究といいます）をふまえたうえで、「新しいこと」を世に問うことが論文の意義であり、価値だとされています。剽窃（ひょうせつ）とは、他人の文章をことわりなく自分の文章にまぎれこませること、つまり自他の文章を区別しないことです。研究の世界で剽窃が絶対に許容されないのは、研究というのは自分の名誉のためにしていることだからです。人の文章をぬすんではいけない。いいかえると、著作権が重視されるということです。大学という空間では、独自性が重視されるのです。たったひとつの正解がどこかにあって、それを共有しようというのが大学の学びではないのです。自分なりの視点で、この世界、この社会、この自然を見つめ、研究する。「自分なりの視点」をつくりだすためには、過去の研究の数々をふまえておく必要があります。それでこそ、いまだに論じられていないことを見いだすことができます。「独自性を要求する」のが研究の世界です。そして、それは悪いことではないと思います。まとめると、他人の知見、意見を参照したときには、その出典を明記するのがルールであり、他人の知見や意見を参照するだけでは不十分である。なぜなら、そこに「自分ならではの独自性がない」からである。これまで多くの人がつみかさねてきた石の山に、自分なりの石をかさねることが研究です。

そういう、「研究の文化」にもとづいたテストであるので、他人とちがう解答を期待するのです。この大学文化を共有できていないと、大学教員の期待からズレたことをやってしまいます。その結果、低い評価をうける場合があります。】

学生への質問：

- ・これまで経験したテストのうち、よかったもの、ひどいと思ったものは、どのようなものでしたか。
- ・この授業について、自分なりに評価してください（どういう点がよかったか、どういう点がよくなかったか。改善すべき点など、思ったままに）。

7月26日のテストの問題（3問め）

「国を単位にして文化を語る」ことの限界／問題点について、具体例をあげて説明してください。

配布プリントのままの解答ではダメ。自分なりに見つけるか、授業でとりあつかったことから発展させること。200字以内。本やウェブの記事などを参照した場合は、「『』によると、」などと出典を書くこと。自分がおもいつく例をあげても問題ない。